

「薄氷」

※おまけSS「巢箱」及び「薄氷」には作品、キャラクターに関するネタバレが多分に含まれています。本編視聴後の閲覧を推奨致します。

まるで夢でも見ているかのような裕福な家庭に引き取られた僕は、それでもまだ、家族というものに何か特別な感情を抱いていた。

家族というのは当然だが一人で作れるものではない、最小構成人数は二人からだ。居心地の良い家庭、僕がいてもおかしくない家……ただただ自分の居場所が欲しかった。

そんなことを悶々と考えていた、受験戦争真っ盛りの高校三年生の冬。医者を目指し医学部に入ろうとするも恥ずかしながら僕の頭が大分足りず、元々志望していた大学のランクを一つも二つも落とし、せめてもの足掻きで医療系の資格を取ろうと試みていた。

家柄はランクアップしたものの、残念ながら地頭自体は良くなかったようだ。

看護師の資格を取れば、石流家が経営している大病院にコネ入社……もとい縁故採用しても
らえるだろうと浅はかな考えで進学した。

が、何の運命の悪戯か、僕は一度も石流病院の看護師になることなく、石流病院近くの学
校の養護教諭になってしまったのだ。

何でも寿退社した先生がいたとか、僕の両親と校長は旧知の仲だとか……まあ様々な理由が
あって事が運んでいった。

人生何があるか分かったもんじゃないね。

二十歳を過ぎると時間の流れが早くなる。それは本当のことだったらしく、就職してあつ
という間に三十路の階段を登ってしまった。

当然、その間家族なんてものどころか居心地の良い居場所なんてものは作れているはずも
なかった。

作っていたのはただ一つ、左腕の傷だけだ。

精神年齢も全く変わっておらず、赤ペンで手の平に線を書いたあの時で止まっている。名
前も、僕の中では「竹千代」のままだ。そのおかげなのかは知らないが、年齢にしては童顔

のままで留まっているのは救いかもしれない。若く見られるに越したことはない。そんなデリケートなお年頃なのだ。

聴き慣れた保健室の扉の開閉音が一つすると、見慣れた顔が扉から覗いていた。

「こんにちは、今日はどうしたのかな？」

別の養護教諭が女生徒に声をかける。(僕はどちらかというとき裏方の事務作業が多いのだ)僕は事務作業に没頭しているふりをしながら、その女の子を目で追う。

よく保健室に通っている女の子は毎回真つ青な顔をして保健室のベッドに横になっていく。どうやらその子は騒がしい場所や人混みがとても苦手らしく、教室にいらるとどうしても具合が悪くなってしまうようだ。ベッドに向かって歩いていく女の子はとても儂げで、思わず見惚れてしまう。

結核は美人がなる病気、なんて昔は言ったらしいが、僕から言わせればそれは全くの逆で病弱な子は魅力的なのだ。

か弱そう、守ってあげたい、とかそういう庇護欲なのだろうか。そんな特別な、ある種歪んだ美があの子にはあった。

兄に自傷している光景を見られて以来皮と骨の下に埋まって微動だにしなかった僕の感情

は、彼女との出会いによってかき乱されるようになった。

彼女が保健室に来る度に胸が高鳴る。運良く声をかけることができた日はケーキの一つでも買って帰りたくなった。

僕だって今までの人生の中で浮いた話の一つや二つ、無かったわけじゃないが、少なからず自分から好きになったことは一度も無かった。

単に「一目惚れ」と言ったら綺麗だが、僕はもういい歳した大人だし、所詮は彼女の表面しか知らないだけに過ぎない。

（あーあ…僕が彼女と同じ年齢だったらな…）

非現実的な妄想をしてしまう自分を哀れに思う日が多々あった。

下校時刻となり、彼女は保健室から退出し帰って行った。ついで別の養護教諭も退出し、保健室には僕一人だけとなった。

（ああ、あの子が僕の彼女…、ううん僕のお嫁さんだったら、良い家庭を一から築けるだろうか）

頭に浮かんだ突飛な空想を振り払うため、思わずかぶりを振る。

（待った待った…あくまであの子は生徒なわけなんだし、手を出したらまずいって…でも…でも…）

誰もいない保健室の窓際で僕はタバコをくゆらせながらあの子との妄想を止められずにはいなかった。

（あの子なら、僕のことを受け止めてくれるんじゃないのか）

（僕のことを、僕の過去を全部ぶちまけても引かずに聞いてくれるんじゃないのか？）

根拠も無い空想がどんどん頭で浮かんでくる。

（僕のように汚れていないあの腕でそっと抱きしめてほしい）

（何も言わずに、そっと僕に寄り添ってほしい）

（そしてそのまま僕のことを抱いてほしい、ううん、抱きたい。めっちゃくちゃにして、壊して、自分の物だけにしたい）

指先に熱を感じ我に返る。持っていた煙草が燃え尽き火が指先までに到達していた。軽く火傷したようだ。これは天罰だろうか。

（ああ、なんて僕は自己中心的な悪い子なんだろう）

脈拍が早い。左腕の傷が疼く。とても口にはできないような空想をしている自分に嫌悪し始める。

(…最近は葉の効きが悪いな)

僕は机の引き出しを開け、中に入っている葉のシートを取り出し頓服用の白い錠剤を口に入れて飲み下す。縋るような思いでいっぱいだった。

また別の日。この日は一段と葉の効き目が悪かった。今まで理性で必死に抑えていたが、とうとうやってしまった。

あの子の担任から教師用の連絡網を拝借した。

名目は「緊急連絡先の確認」。職権濫用だが、間違った使い方はしていないから大丈夫、多分。

就業後、連絡網を頼りに入手したその子の家の住所をカーナビに打ち込み、車を走らせる。到着地は学校から十五分程にある閑静な住宅街だった。

あの子の家の前を通る。あの子の部屋はどの辺りだろうか。舐めるように家を眺める。

あの子が玄関のドアを開けて、靴を脱いで、階段をゆっくりと登っているところが目に浮かぶ。

今回のこの行動は冷静に考えて、ストーカーと呼ばれてもおかしくない行為だ。とはいえ家の前を徐行で走らせ通り過ぎただけなのでまだセーフだろう、きっと。

僕は興奮を抑えながら近くにあった公園まで車を走らせ、駐車場に止める。日がすっかり落ちて、いる時間だからか、駐車場には人っ子一人、車一台おらずほっと胸を撫で下ろす。
(僕はもう大人だ、分別の無い子供じゃない。越えてはいけない一線はきちんと引かなければいけない)

自分に強く言い聞かせる。

ルームライトを付けずに鞆の中をまさぐり、ミネラルウォーターと薬のシートを取り出す。無造作にシートを親指で押し、必要以上の量の薬を手の平にぶちまけた。用法容量を守り守れるほど冷静ではいられなかった。薬を飲み込む音がやけに車内に響く。

(薬があつてよかった)

薬と水が胃まで落ち、続いて白衣のポケットをまさぐる。右手に「それ」の硬い感触を確認するとそれをしっかりと握る。

(もし薬が無かったら…僕は)

スナップをきかせて右手を振る。シャキン、と小気味のいい音を立ててそれは展開され、怪しくも艶かしい光を先端に輝かせる。慣れた動作でそれを左腕に当てた。

鼓動がうるさい。視線がおぼつかない。右手が震える。いつもならば躊躇いなく事に及ん

でいるのだが、あの子の顔が脳裏に過ぎつては「やってはいけないこと」だと自制心が強まる。

薬の効果もあるのだろうか。

(…今日はやめておこう、別に無理してやることでもないし)

こんな車内で、ましてや公園の駐車場ですることではない。

(こんなことするくらいなら、献血に行った方がいいんだろうけれど、僕葉飲んでるからな)

どんな理由で血を捧げに行こうと思っているのだと、あははと笑う。一人でケタケタと笑うなどとても虚しい、スツと真顔になる。

(二線を越えてしまったら、歯止めが効かないんだろうな)

ため息を一つつくとそれを折り畳んで白衣のポケットにしまう。

ティッシュの無駄な消費も、車内清掃もしなくても済みそうだ。

僕は気を落ち着かせてから車のエンジンをかける。ふいに、助手席に乗せていた鞆からはみ出た文庫本が視界に入った。

「あ、そうだ、兄さんに返さなきゃいけなかったんだ」

兄とは定期的に会っては、読んだ本の感想を話し合ったり、自分の好きな本を交換しあったりするのだ。それこそ、本なんて学校で甥伝いに兄に返してもらえれば済む話なのだけれど、どうせなら一言二言でも感想を言って返したい。僕はメールで兄に一報をし、この辺りの土地勘が無いのでカーナビに兄の家まで案内してもらおうことにした。すると、普段通らないルートが画面上に表示されるも、僕が適当に車を走らせるよかマシだろうと特に気に留めずに案内に従う。

目的地の兄の家まであと数分といった道中、灯の少ない薄暗い神社が目に入った。

「こんなところに神社？」

手入れを頻繁にされていないのだろう、木の葉やゴミが石畳の上に落ちている。少々不気味な雰囲気は漂っているが、寂れた神社なのだと思えば普通の神社にも見える。

神社を前にして思わず自分の日頃の行いを振り返る。生徒への性的な妄想、私的な目的での連絡網の閲覧、それを利用して生徒の家の前まで行く。…自分の中には罪悪感が確実に存在していた。

時計を見ると兄に連絡した予定の時刻にはまだ早い。

「お参りでもしていこうかな」

僕は財布からお札を一枚取り出し車から出て、鍵もかけずに神社の中へと入って行った。

（本当にごめんなさい、僕は地獄に落ちても文句は言えません）

お賽銭にしては大金である千円札を賽銭箱に入れ、開口一番謝罪をした。

（僕は本当におかしくなってしまったのだと思います、今までコントロールできていたことが、薬を飲めば抑えられた欲が、段々と暴走してきているんです）

神社は懺悔する場所ではないのは百も承知なのだが、神様相手以外に相談相手など通院している病院の医者くらいしかないのですどうか許してほしい。

懺悔も程々に、僕はお祈りをする。

（兄がこの先心身共に健康で生きていきますように、甥が幼なじみちゃんとおつきましますように）

僕の大事な…血の繋がらない兄と甥の将来を祈る。

（ただどうか、もし神様が許してくれるのなら…）

（少しだけでもいいから僕も幸せになりますように）

わがままにも程がある。あれだけのことをしておいて自分も幸せになりたいなんて。指にできた火傷が物語っているじゃないか、あれは天罰だ。

ただこれは紛れもない、嘘偽りない本心だったのだ。神様の前で隠しごとをする方が余程失礼にも思えた。

お願い事を言い終わり、僕は神社の前に止めていた車に戻ろうと踵を返した。はずだった。段々と目の前が暗転していく。

「あれ…薬飲み過ぎちゃったかな…」

公園の駐車場で飲んだ薬はオーバードーズと言ってしまうには程遠い量だったが、普通に服用する量と比べたら数倍以上だ。体調が悪くなっても不思議ではない。僕は石畳の上でへたり込む。

「あー…車鍵かけておけば良かったな…」

徐々に意識が遠のいていく。僕への天罰は最後まで終わっていないかったのだなと心の中で笑いながら、まぶたをゆっくり閉じた。